

無意味は、今ここに存在している

私たちは時間をもっている。それはまさに
人生のことだ。時間が尽きるまで、私たちは
物語に出会い続ける。その断片が集まって世
界はできている。ぜひこれを頭に浮かべなが
ら、著者の語りの中を巡ってほしい。

本書は「紀伊国屋じんぶん大賞2016」
を受賞している。社会学者として、人々の唯
一無二の語りを聞き取っている著者。彼が日
々考えている、社会、人、物語、つながり。
これらの在り方や、そこにただ存在している

無意味な「何か」について表現されたものが
本書だ。私は読後、自分が出会った物語を振
り返り、似た「何か」を探したくなった。私
たちも言葉にしたいとどこかで思っていたこ
とが、ここでは語られている。

著者は多くの物語を近くも遠くもない、程
よい距離から見ている。そして社会や私たち

に向けて、その断片をそっと置いている。こ
うしてページは進んでいく。
タイトルに、社会学という言葉がある。私
が本書を選んだのは社会学を専攻しているか
らだ。しかし、ページをパラパラめくると無
意味や孤独、断片といった教科書では見かけ
ないような抽象的で独特な言葉がちりばめら
れており、より興味をもった。堅苦しい内容
を想像する人もいるだろうが、それは違う。
本書はどこにでも転がっている私たちの日常
が舞台だ。そこから著者の考えがエッセイ風
に語られているのだが、登場する人々から垣
間見える人間らしさがとても愛らしい。かと
思えば少しのホラーも感じる。温かさと奇妙
さを同時に楽しむことができるのだ。まだま
だ人生経験の少ない私には物語が時にフィク
ションにさえ感じたが、すべてがノンフィク
ションだ。私は夢中になって読んだ。
「手のひらに乗っていた小石はそれぞれか
けがえのない、世界にひとつしかないものだ

った。そしてそれが世界中の路上に無数に転がっている」。著者ならではの静かに印象に残る文章だ。本書のテーマは「つながり」。人と人のつながりは想像しやすい。では、人とモノ、動物、現象のつながりは何か。この問いの答えは、幼少期に奇妙な癖として小石を拾い、よく眺めていたという著者の語りに含まれている。また、小石の在り方は私たちにも当てはまる。私たちはかけがえのない無意味な存在なのだ。そして、日常には「つながり」が溢れているからこそ、楽しくなる、助け合える。優しさや愛情が生まれる。これらを再確認できる場所が、ここにある。